

昇道無窮極

金子大栄

一

曾我先生と私は同じ北国、越後であります。先生と知り合いになりました。もう六十年以上になります。もっと言えば、大学の学生時代からですから、まあ七十年といってもいいわけです。その学生時代では、先生と私は五年違いで、先生は研究科、私は本科一年というようなことでありました。そして、その頃から曾我先生は兄さんであり、私は弟である、という気持ちもずっと続いております。それがずっと後になりますと、私は曾我先生と言わねばならないほどいろいろと御教化にあづかったのであります。そういうようなことで、亡くなられました。今もなお、何か寂しい頼りないような感じがするのであります。こちらで追憶の会を開くから出てお話をせよ、ということでもあります。喜んで参った次第であります。

さて題目は「昇道無窮極」ということであります。これは十数年前に先生が御法主から「無極院」という院号をいただきました。生きておられる間に院号をいただくということは、昔の講者にもないことではないのでありますけれども、極めて稀なことなんでしょう。それが御生前にいただくということは、先生のお徳のしからしむるところであるのであります。しかしその「無極」という言葉は、先生のほうから、いただくならばこういう名で、ということでお選びになったのでありますから、そこで今日は、「無極院」という名をお選びになりました。お心持ちは、

どういうことであつたか、ということをお話してみたいと思ひまして「昇道無窮極」という題を出したのであります。

このお言葉は、『大無量寿経』の下巻にありまして、「昇道無窮極、易往而無人」等々と言つてあります。その言葉からお選びになつたのであらうかと、思ふのであります。もつとも『大無量寿経』にはもう一つ無極という言葉がある。それは「虚無之身無極之体」という言葉でありまして、これは『無量寿経』より曇鸞大師は、『讚阿弥陀仏偈』を作られました。その中にもその言葉を用いてあり、そして、それを『浄土和讃』にも

顔容端政たぐひなし 精微妙軀非人天

虚無之身無極体 平等力を帰命せよ

とあります。そこにも無極という言葉があるので、その無極体とあるのも、昇道無極ということも変つたことではないのですから、どちらでもいいのであります。けれども多分、昇道無極の方が先生のお選びになつた根拠なのであらうと、こう思ひまして「昇道無窮極」という題にいたしました次第であります。

この言葉は『大経』下巻にあり、それまでは仏告阿難、仏告阿難と阿難尊者を呼んでお話をいらつしやる。それが初めて「仏告弥勒菩薩」と弥勒菩薩を呼んで説かれることになつた、そこに出てくる言葉であります。そしてそれは、「昇道無窮極、易往而無人」と続いておりますので、『大無量寿経』はそこまでは易往を説き、それから無人を現はすものと解せられて来ました。その行き易いというのは、本願の力で参らしていただくのであるから、これより行き易いことはない。

「然るに世人薄俗にして共に不急の事を諍う」

と、それにもかかわらず世の中の人はそれを信じない、信じないからして浄土には行き易くして人がないところである、という言葉が出てきます。そこに昇道無窮極という言葉があるわけであります。

その昇道無窮極という言葉について、親鸞聖人は『尊号真像銘文』の中に

「昇はのぼるといふ、のぼるといふは無上涅槃にいたる、これを昇といふ也。道は大涅槃道也、無窮極といふは、きわまりなしと也。」

と言っております。だから昇道というのは大涅槃の道と大の字を用いて、自分だけ悟を開けばいいという道ではない。一切衆生皆共に救われてゆくところの大涅槃の道である。その大涅槃の道は極まりのないものであるということでもあります。経文といたしましては、それは浄土の菩薩の徳である。浄土には菩薩が非常にたくさんおいでになる、そのたくさんの方々の徳がそれが昇道無窮極ということである、ということでもあります。この言葉によって無極という名前を選ばれた心持ちは、心ひそかに浄土の菩薩にあやかっていたらたのであると、こう考えて少しも差し支えないわけがあります。自分は浄土の菩薩でないけれども、しかし浄土の菩薩になれば昇道無窮極で、涅槃の道を求めてその道は極まりのないことである、自分もその道に往くのである、ということであるに違いない。こういうことで先生の一生においては、浄土の菩薩にあやかるといふことがあったように思っております。

十数年前、いやもう二十年も前になりますか、年始状に『浄土論』のお言葉を書いていたことがある。

「何等世界無 仏法功德宝 我願皆往生 示仏法如仏」とあります。これは天親菩薩の『浄土論』の願生偈の終りの方に浄土の菩薩の徳を述べられたお言葉であります。何らの世界にか仏法功德宝無きや、どこに仏法のないところがあるか。もし仏法のないところがあるならば私はそこへ行く。往生ということをし、そこでは極楽へ往くということではなくて無仏法のところへ行く、ということに使われてあります。私は無仏法のところへ行つて仏法を示すこと、仏さまと同じように仏法の尊さを弘めてみたいという、それが浄土の菩薩の願いであり浄土の菩薩の徳であると、説いてあるのであります。そのお言葉を年始状に書いていただいたことでもありますから、先生は自分自らを浄土の菩薩にあやかっていたらっしゃるのである、ということがよくわかるわけであります。なるほどそれなればこそ、お若いときからともうでありますけれども、晩年になってからでもどんなところへでもおいでになった。御招待のあるところな

らば喜んで行くということで、——どうも今日私ごとは話したくないのでありますけれども、私はあの終戦の昭和二十年からすっかり気が弱くなりまして出るのが嫌で引っ込み思案になっておったのであります。先生は逆にあのころから殊にどこでも行って話をしよう、という気持ちになられたようであります。それが浄土の菩薩の徳にあやかって、わしもその浄土の菩薩になるのだ、今日からみればそうである、先生は浄土の菩薩であったのだ、こういただいて少しも差し支えないことでありましょう。

もう一つ思い出すことは、往相還相ということ、往相の仏道、還相の菩薩道という、これはみなさんたびたびお聞きになったことかもしれません。往相は仏道である、還相は菩薩の道である。どちらも極まりのないものであるといえればそれまででありますけれども、菩薩道こそ極まりのないものである。それから法蔵菩薩の本願というものを了解せられ、私たちにはちよつとむずかしいことでありますけれども、阿頼耶識は法蔵菩薩であるといふふうな学問も出てきております。とにかくそこに還相の菩薩道というものがあって、その還相の菩薩道というものは菩薩の道ですからそれは極まりのないものである。これですんだということのないものが菩薩道であります。迷える衆生があらん限り、仏の徳を具えながら仏にならずに済度をしていこうというそれが無極、極まりのないものである、ということでありましょうね。そういたしますと、先生の一生涯は還相廻向の一生であった、ということにもなるわけであります。浄土の菩薩である、ということになれば、お還りになった、と言わなければならぬ。もうやるだけのことはやった、やるだけのことはやったということになれば、もう用がすんで、浄土へ還る、浄土の菩薩であるから浄土へお還りになったということでありましょう。還相の菩薩だということになると、やっぱり同じことですか。しかし還相廻向ということになる、私たちも今日こうやって往生浄土の道を説いたり聞いたりしておるのであります。やがて一生の命終れば仏になる身にさしていただいて、そうして還相廻向に出るのだ、ということになると、浄土の菩薩がこの世へ出てこられたということ、それから私たちもまたやがて還相廻向に出るのだということと同じであるか違うで

あろうか、こんなことを一つ問題にして話してみたいと思います。

一一

そこで話は横へ逸れるようですが、私は昨年安居を勤めました。その安居というものは、講者が全国から集まりました法中を相手に、お聖教の講義をするのであります。その安居の講者を勤められるということも、先生は非常に重大に考えておられました。したがって講者として安居を勤めるということは、大変にありがたいことであると思うていらっしやいました。このへんについていろいろ感想も浮かぶのであります。その安居が昨年私に当たりまして、『讚阿弥陀仏偈和讚』を講釈いたしました。その『讚阿弥陀仏偈和讚』というのは、和讚の一番初めの四十八首であります。

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまへり
法身の光輪きはもなく 世の盲冥をてらすなり
というところから始まりまして、
仏慧功德をほめしめて 十方の有縁にきかしめん
信心すでにえんひとは つねに仏恩報ずべし

とあるのが『讚阿弥陀仏偈和讚』であります。そして、それは『大無量寿経』のこころを支那の曇鸞大師がお書きになつたものであります。漢文で書いてありますから漢讀とでもいいますか。その『讚阿弥陀仏偈』を日本の言葉に和らげて書いていただいたのが『讚阿弥陀仏偈和讚』ですから、漢讀を和讚にせられたその四十八首、その初めに、
智慧の光明から十二光、十三首目に

光明月日に勝過して 超日月光となづけたり

釈迦嘆じてなをつぎず 無等等を帰命せよ

とあって、その次に

弥陀初会の聖衆は

算数のおよぶことぞなき

浄土をねがはんひとはみな 広大会を帰命せよ

とあります。それから八首ですが、その初めの四首は昔の講者では旧住の菩薩といつて、元から住んでおられる菩薩の徳を述べられたものであると云う。これは法蔵菩薩が仏になられたそのときからのお弟子とでも考えましようかね。「弥陀初会の聖衆」というのは阿弥陀仏の仏になられたそのときの説法を聴聞した者、それが「算数のおよぶことぞなき」だからとてもたくさんあって、そのたくさんの方が十劫の昔に阿弥陀仏の浄土に生れて菩薩になられた。だからこれから浄土へ生れたいと願う者は、広大会という賑かな多勢集まっておるそのところであるということを帰命せよ。広大会の世界である、ということがまず述べてあるのであります。この広大会の世界であるということが、これが念仏信者の一つの願いであり喜びである、ということをお忘れ下さらんように願いたい。

亡くなられてから十数年たつ晁鳥さんが「広大会」という雑誌を出された。みんな往くんたということでしょうね。みんな後になり先になり、後先はあるかしらんけれども、とにかくこの世へ生れたほどの者は、仏法聴聞して念仏してみんなそこへ往く、廣大無辺の世界、それが浄土というものである。その浄土に帰せよということから始まりまして、安楽無量の菩薩 一生補処にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ 穢国にかならず化するなれ

その広大会の、数限りのないところの弥陀初会の聖衆は「一生補処にいたるなり」で、みな仏になる資格を持っていて、仏になる資格を持っているのであります。が、「普賢の徳に帰してこそ」、——普賢はあまねくかしこい、みんなを救い、みんなを幸せにする。普賢という字は、みんなを智慧者にするというよりは、みんなを幸せにするということのほうが適當のようであります。詳しいことは申しませんが——だからみんなを心からの幸せにしたいとい

う、そういう徳を持たれて、「穢国にかならず化するなれ」、みんな不幸せであり困っており悩んでおるところのその世界へ出てきて、そうして衆生済度して下さるのである。

十方衆生のためにとて 如来の法蔵あつめてぞ

本願弘誓に帰せしむる 大心海を帰命せよ

と、浄土からこの世へ出てきて一体何をなさるかというのと、「十方衆生のためにとて如来の法蔵あつめてぞ」、如来の法蔵ですから八万四千の法、ほんとうに念仏一つに導くためには華嚴宗の話も出るだろう、天台宗の話も出るだろう、八万四千の法蔵みんな集めてきて、そうしてこの手あの手と気配りをしてこの本願弘誓に帰せしむる。その精神は結局仏の御願い、仏の本願のおこころへとみんなが落ち着くように、というところに、仏の大心海というものがあるのである。

観音勢至もろともに 慈光世界を照曜し

有縁を度してしばらくも 休息あることなかりけり

そこに観音勢至が出てきた。観音勢至というのは阿弥陀が仏になれるときに、一番先のお弟子である、ということも言ってもいいのかね。お釈迦様でいえば舍利弗・目連であろうか。お弟子たちはたくさんあるけれども代表するのは舍利弗・目連である。阿弥陀を代表するものは観音勢至である。この四首は、先ほど申しましたように旧住の菩薩、もうすでに浄土へ往っていらっしやるどころの菩薩の徳である。それから引き続いて新任の菩薩、これから往く菩薩たちがあとの四首で

安楽浄土にいたるひと 五濁悪世にかへりては

釈迦牟尼仏のごとくにて 利益衆生はきはもなし

これは、前の四首は浄土におられる菩薩のことであったが、これから浄土へ往く者も五濁悪世へ還ってくる。そうす

ると私たちのようなものでも、還相でこの世へ還ってくるとお釈迦様のように多くの人を済度することができるのであると、こうあって、

神力自在なることは 測量すべきことぞなき

不思議の徳をあつめたり 無上尊を帰命せよ

浄土へまいらせていただくというと、神力自在なることは、神通自在であの人の心もわかる、この人の心もわかるということである。有縁の人々を済度することができる身になるのである。そうして

安楽声聞菩薩衆 人天智慧ほがらかに

身相莊嚴みなおなじ 他方に順じて名をつらぬ

浄土へ往くとうなるかという、やはり声聞といって説法ばかり聞いておる人もある。菩薩で衆生済度に出かける人もあるのである。人間のように大地の上を歩んでおる人もあるし、天人のように虚空のほうを舞うておる人もある。そうすると何か浄土へ行っても声聞があったり菩薩があったり、男があったり女があったり、いろいろあるかと思うが、「身相莊嚴みなおなじ」、みんな同じことである。浄土へ往くというと、誰が誰だかわからなくなる、みな同じことだからね。

顔容端政たぐひなし 精微妙軀非人天

虚無之身無極体 平等力を帰命せよ

浄土へ参るとみな美しい、三十二相具えておつてみなりっぱな人ばかりである。浄土へ参る人々はみなきれいである。虚無の身、無極の体と、そこへ「無極」が出てきます。「平等力を帰命せよ」、平等力ということは浄土へ往けばみな一つになるのである。浄土は一如の世界である。一如の世界ならば男も女も区別がないし、智者も愚者も区別がない。それではどうして国中人天とか声聞菩薩という言葉があるかというと、それはこの世にそういう言葉があるから

浄土もそれによって名をつけるのである。この世においてはどこまでも男は男、女は女、先輩は先輩、後輩は後輩というふうにいるいろいろわけておるけれども、浄土へ往けば、同じく一如に乗してみな一つ心にならしめられるのである。ということで八首のうち前四首は元から浄土におられる菩薩の徳、後の四首はこれから浄土へ参らさしていただくところの往生人を詠っている。そうしますと浄土の菩薩がこの世の中へ出て衆生済度される仕事ですんでしまえば、浄土へ還られるのである。私たちは死んでから後にこの世へ還るのである、ということになるのであろうか。そうなるのと往相還相の説は大変ありがたいことである。けれども、正直なことを言うとうわからない。どんなものだろうね。

三

こういうことを拝読しまして一つわかりますことは、一如の世界ということでもあります。あの世は一如の世界である、一如の世界であるということは隔てがないということでもあります。その隔てがないということは新しいとか古いとかいうその隔てがないということであると、こうまずただけなのであろうか。先に往生した人は先輩で、私たちは後から往くのだから後輩だという、そんなことはないんだ。だからお言葉から言えば旧住の菩薩でもう十劫の昔から菩薩である方があり、またこれから参らせていただくという方があるんだから、古い往生人と新しい往生人がそこにあるように思われる。しかしそうではない。そうであつたら一如でない。古いも新しいもない、みな一如になるのである、ということである。それは私勝手に言うのではない。昔の講者も、「弥陀初会の聖衆は、算数のおよぶことぞなき、浄土をねがはんひとみな、廣大会を帰命せよ」とある、その弥陀初会というのは、阿弥陀が仏になり初めて説法なされた、そのときの説法を聞いた人間が数限りがない、ということなんですが、そうするとこれからはどうなんですか。それも弥陀初会の聖衆なんだと領解しておられます。昔の講者はなかなかえらいことを言われる方がありまして、われわれも弥陀初会の聖衆であり、後から往つても弥陀初会の聖衆であると、いかにもありがたいと

ころですね。大体この世においてこそ、あの人は先に参った、私は後で往くのであると、こういうのでありますけれども、浄土へ往けば後も先もない。仏の心から言えば、みな初めて参ったのである。弥陀初会の聖衆の中にみな私たちが撰っておるのである。

これは少し感じが変わるかもしれないけれども、『華嚴経』を読みますと、——『華嚴経』については私は学校の専門で学びました。けれどもあまり広大無辺でわからないものだから、もうやめようと思うたことがある。そのときに先生に叱られたことがある。『華嚴経』は読みさえすればよいのだ、『華嚴経』を講釈しようとしたり、華嚴哲学なんということを考えようとするからわからない。読みさえすればよいのである、と言われたことがある。「ハイ」と畏まって、先生の言われたことには殆んど背いたことはない。『華嚴経』を読んで今でも感ずるのであります。その経には、お釈迦様が仏になられたときのこと説いてあるのであります。そのときに天地万物あらゆるものの神々、菩薩方みんな集まっておられる。そのときに弥陀初会のことを思うのであります。そうすればお釈迦様が悟りを開かれたそのときの聴衆として私たちもおるのである。『大経』でもそうです。お弟子としてわかっておる名前をずっとあげてありますが、その後で諸々の菩薩の名前が出てくる。あの菩薩の中へみな私たちも入っておるといってもいいのではないか。『大無量寿経』を読むときには、私たちは『大無量寿経』を聴聞しておるのである。こう考えれば後も先もない。『華嚴経』でも何かそういうことを言おうとしているようであります。ともかく今の仏教学者は、みな釈迦成仏時の聖衆だといわれます。そのように、みな弥陀初会の聖衆であります。それなら後から往く者はないか。いや後から行っても同じことであって、後だの先だのないのである。後・先のないのが浄土である。そうしますと、還相廻向ということも後も先もないのでしよう。法然上人や親鸞聖人の還相廻向はもうすんでしまっている。私たちはまだ残っておるということになるかなあ。そうすると一体どうなるんだらうね。真実は後も先もないんだらう。死ねばみんな仏になるということは、古い仏、新しい仏ということではないということである。新しい仏、古い仏というこ

とは、この世のきまりで言うのであって、そこにただ一筋の伝統の流れというものがある。一つの伝統の流れという考え方、先生などもそういうことを言われたようであります。これは間違いないことでありましょう。今日のみなさんにしても月愛苑へ出て話を聞く、それは自分が聞く、そうに違いないのであります。けれども、それは親も聴聞したのである。おじいさんも聴聞したのである。ずうっと先祖代々聞かしていただいたのであるという、そのお蔭で聞いているのではないのでしょうか。つまりそういう背後の伝統というものがあって、「たまたま行信を獲ば遠く宿縁を慶べ」と言われるのは、このことかもしれない。親が聞いてくれたお蔭で、おばあさんが聞いてくれたお蔭で、先祖代々御縁があったお蔭で、それがなければ私が一遍や二遍でわかるはずがない。よほど賢い人でもそういう縁のない人はなかなかわからない。自分のようなものはそう簡単にわかるはずはないのであるけれども、そこに違った言葉で言えば、歴史精神というものがある。その伝統精神によって今日自分が拝むことになったのである、と同時に私が拝む、私が念仏を称えさしていただくということが、それが伝統精神を成り立たせると言うことである。(伝統精神によって私たちが仏法を聞く身になる、仏法を聞く身になるということによって伝統精神が成り立つのである。こういうことならば後も先もない。浄土に生れた人々が後も先もないならば、還相廻向も後も先もないであろう。ただ一筋の流れなるがゆえに、それがまた未来にいたって極まりのないものに違いない。こういうことであります。

四

そういったしますと、もう一つ大変なことは、個々の領解が違うというようなことも浄土へ往けばないのでないかと言ふことでもあります。

私いつでも思ひ出す話の一つある。それはもう数十年前であります。私が浄土のことについて昔の人があまり言わないようなことを言ったことがある。その時それはけしからん、それは異端であるといつて、咎められた方がある。

三河の多田さんという方である。あの方は三河の人ですが、三河に山田文昭という人があって、この人は私の言うこともよいと思う、多田さんの言われることも無理はないと考えておられたようです。三河へ行きますと、その山田さんの感化も残っておるのでありますが、あるとき私は三河のあるお寺へ招待されて、そこへ行って話したところがきわめてまじめな若い坊さんであります。私に、このお同行は実に不思議なんです。山田さんの話も喜んで聞きますし、多田さんの話も喜んで聞きますし、またあなたの話もこうして喜んで聞いていますと、こう言って如何にも不思議そうに言われました。そこで私は、そうですね、ありますが、ありがたいことですね。そのお同行のお蔭で、私も浄土へ行けばお二人に顔を合わせます。この世の中で、ああだこうだと言うておるようには、浄土へ往ってもそういうことになるかというと、どうなるんだらうね。浄土は広大だから、ここで多田会場をつくるか、ここで山田道場をつくるか、というようなことになりましょうね。いやもう少し考えましょう。西がどうの東がどうのと言うことも、或は、あの人の話は法に偏っておる。この人の話は機である。あの人の話は古い、この人の話は新しいという。それは結構なことだと私は思うています。互いに磨きをかけて、互いに論じ合う、そうして本当の正しい道を求めようとする、そのことはいいのである。しかし浄土へ往ったら止めましょうね。浄土へ往って、いかに広いといっても、これはお東の人が来る浄土であって、お西の人は来てはならないということであって、浄土は広大でなくて、何か狭いことになってしまいます。ただそういうことがわかったならば、この世においてももう少し考えてもいいこともあるんじゃないかと、時々思うのであります。

大体、今日は仏教統一ということがインテリの間にかまじうなっていて、わが宗かしこしなんていかない。もと同じ全一仏教であるのだから、ただ一つの仏教であるということをはっきりしななければならないのではないか、こういうふうには言われております。もっともなことです。もっともですけれども、やはり娑婆ですから、真言宗もあつたり天台宗もあつたらいいじゃないかと思ひます。けれども浄土までそんなことでは困ります。ところがお墓なんか、これは

真言宗のお墓、これは天台宗のお墓というような、ちょっと金子式の頭になるかしらんけれども、何か気になるのです。がしかし、この世の中は善人あり悪人あり、先輩あり後輩ありと同じように、諸宗旨のあることはきわめて結構なわけではありませんか。ただしかしながら、帰するところは一である、ということをお忘れないようにして、同じく一如の世界、もう一つ精神の世界というものがあってそれが廣大無辺である。浄土には天台宗も華嚴宗もない、東も西もない、その広大の世界ということ、これが菩薩の精神というものである。それを思いながら娑婆へ還ってきてそうして隔てのない世界へ往くのであるのにもかかわらず、あれこれと申すことのお拙なさよと、この世の懺悔ということにもなるのでしよう。

それをもう一つ進めますというと、何も宗旨のことだけでない。私たちの可愛いと憎いと申すことも、そうではないでしょうか。これはかなり若いときで、北国生れの私だから何でもつけつけ不遠慮に言った時代があったかもしれませんが、九州か何かへ行ったときですが、浄土へ参りたいと思えますけれどもなかなか安心決定ができませんと言われた方がある。その時、私はあなた本当に浄土へ往きたいのか、浄土へ往ってもいいことありませんよ、だってこの世の中では嫌いな人と付き合わないのでしよう、浄土はそんなわけにいかない。あなたの嫌いな人も沢山おるから、こんなところへ来るんではなかった、ということになりはしませんか、と申したこともあります。そのときは何か皮肉のようにいわれましたが、今日では私は皮肉でないと申しております。そうじゃありませんか。そういうことを一度考えてみようじゃありませんか。可愛いだけの憎いだの、敵だの味方だのというておるけれども、同一念仏の世界になるのである。いずれ先に生れるか今生れるか後に生れるかである。

已 今当の往生は　　この土の衆生のみならず

十方仏土よりきたる　無量無数不可計なり

と、こうありますからして、その世界は自国だの他国だのということすらない筈であります。自分だの他人だのいう

ことのない筈であります。そうしてみれば、敵だの味方だの、憎い者だの可愛い者だの、と云うことのない一つの世界があるのである。それが浄土というものである。それが浄土であるということを念じたならば、この世の愛憎違順ということもいくらか考えが変わるのでないでしょうか。嫁だ姑だど憎んでおるけれども、その憎い姑の顔も死ねば見なければならぬかもしれない。そんなところへ行くのなら私はやめますとおっしゃいますか。そんなら念仏称えるのはやめます、とおっしゃいますか。そうでないでしょう。何にせこの世の中にいろいろな因縁があつて、親子の名のりをして、嫁だ姑だというておるのに、このように憎み合わなければならぬということは、何という申し訳のないことであるか。念仏一つになりましょうね、死ねば一つ心になりましょうね、というところ、そこに浄土を願うものの心があるべきであります。

そうしますと、そこに還相廻向ということを思い、ますと一つの伝統の流れがあつて、先に生れる者、後に生れる者、後も前もない、みんな弥陀初会の聖衆であると同じように、自分の意見、他人の意見というようなものはない。みんな一つ心になる世界がある、ということがわかれば、そこで話し合いというものができるといふのでしよう。浄土の教えというものがわかれば、どれだけ意見が違つておつても、結局一つのところを願うておるのではないか、ということ、話し合いができるのであります。聖徳太子が「ともにこれ凡夫である」ということで話し合いの道を開かれたということも、篤く三宝を敬うという一つの世界がある。その一つの世界があるということがわかれば、必ず話し合いができるに違いない。そうすれば可愛いか憎いかいろいろなことを言っておりますけれども、そこにお詫びのしあひということもあるでしょうね。そういうことでお互いにお詫びをしあうところの一つの世界も出てくるはずではないでしょうか。そうさせる場があつた世というものである。

そこに浄土の教えの無上涅槃道がある。昇道というのは無上涅槃に昇るといふことである。道というのは大涅槃道であつて、小涅槃道ではない。自分さえ救われればよいという、これが小涅槃道であります。自分が救われてゆく道が

また一切の人々の救われる道である。一切衆生の救われる道において私が救われてゆくのである、そこに大涅槃がある。その大涅槃、そこに往相還相がある。

無始流転の苦をすてて 無上涅槃を期すること

如来二種の廻向の 恩徳まことに謝しがたし

と、昇道無窮極という題を出しまして、量深先生が、無極院という院号をお選びになりました心持ちをお察しいたしまして、いろいろと感想を述べさしていただいていることであります。

先生の思い出は、先ほど申しましたように、兄さんと弟、兄さんと弟というものは面白いものですわ。仲の悪い兄弟もあるけれども、私らは兄弟仲がよかった。兄さんは何を言うても腹を立てなかった。「お前だめだ」と言われたら、「ハイそうかね」「なかなかうまいこと言うようになった」「そうかね」妙なものだね。他の人が言うとう気になることでも、先生に言われるのはありがたいことであつた。だから、やっぱり兄さんと言っておつたときのほうがよかつたような気がしますけれども、どうもそういうわけにもいかないものであつて、先生はやはり先生であつて、その教えをいただいたという点から言えば、すべてが先生のお蔭であり、先生からいただいたものばかりであります。先生はくれた覚えがないとおっしゃるかもしれない、また私も何時もらつたかわからないけれども、とにかくそのお蔭によってこうなりましたということ、先生であるに違いないのであります。

それから、今いただきました記録を見ると、晩年には私を先生と言われた、という。これはちょっと見当つかないことだけれども、まさか先生が年取られて惚けてしまわれた、とは言えないとすると、これは甚だ畏れ多いことではありますが、しかしこれも、先程申しましたように、後にも先もないということかもしれません。後にも先もない、先輩も後輩もない、同じく一如に乗じて、一如の世界に生れるのであるというありがたさは、こういうようなところにも戴かれるのではないのでしょうか。

昇道無窮極と題しまして、先生の無極院という院号についての、自分で思いついたことをいろいろ申したので、この題目に対する話はすんだのであります。しかし、もう一つ何か私が長い一生の間にお聞きして、耳の底に残ってお話をしていこうというところと考えてみたのであります。それにつきましては、多分このことだけは私だけが知っておいて、皆さんはあるいはお聞きにならなかったのではないかと思うことが一つあるのであります。と申ししても、いやその話は聞いたとおっしゃるかもしれませんが、多分この話は、そう度々はなさらなかったであろうと思ふことが、一つあるのであります。それは明治の時代であったか、或は大正の初めであったか、私のお寺へ二年間続けて来てお話をしていたことがあります。そのころは午前中法中が集まっていろいろお話を聞く、初めの年は七高僧の話でしたかな。翌年は『大経』『観経』のお話だったと思います。午後は一般のお集まりの方に対して、ことに法話ということをお願いしたのですが、その法話の中に「もったいなさ」ということについてお話がありました。

それはその時分の新門様で句仏上人といわれた方でありますが、あのお方に

勿体なや祖師は紙子の九十年

という俳句があります。その俳句が非常に感動を与えまして、これが新門様の俳句であるということ、宗門の人々はないへんに感激したのであります。多分曾我先生もその感激された一人であったのでありましょう。その句をまず最初に誦まれて、そうしてその「勿体なや」という言葉の感じを一時間ほど話されました。何を話されたか、どういふことを言われたか、覚えていません。けれども深い感動をしたということだけは、残っておるのであります。近頃になりまして、私も一度この同じ題で一時間話して見たい、そう思うのですけれども、さて何をお話しになったも

のやら、どんなことをお説きになったものやらすっかり忘れてしまつて、ただ深い感動を与えられたということだけが残つておる。それで思うのですが、よく皆さんの中でも、お寺で話を聞いているときにはありがたかつたけれども家へ帰つてみたらば、何もかも忘れてしまつた、とよく言われることがありますが、せつかく聞いたことを忘れてしまふということは、あまりいいことでもないかもしれませんがね。しかし忘れてもありがたかつたということだけが残つておれば、非常に結構なことではないでしょうか。話を聞いて覚えておつて、こういう話であつた、ああいう話であつた、と覚えておつても、ありがたかつたというところがぬけてしまつたら、却つていけないのではないか。こんなふうにも思うてみて、お忘れになつてもよいのですと、私は言いませんけれども、しかしながら忘れたからといって歎く必要はない。思い出として残らなくても、何かもう一つ奥に記憶があつて、それが忘れられない。ありがたかつたという感じが、先ほど申しました祖先伝来の精神というものがあつて、その精神というものを教えてくれるのであろうか。こんなふうにも思ひまして、自分で忘れたことを手掛りとして、ありがたいうことさえ残つておればよいのだなと、思つておるのであります。

さて、その「勿体なや」という言葉ですが、まず私のことですからどこかそういう言葉が、聖教にないかと尋ねてみるのですけれどもありません。ありがたいう言葉もないようですが、これはなくとも「遇い難くして今遇うことを得たり」とある。そのありがたいう言葉は、「有ること難い」ということですから、遇いがたいということは、私たちが普通使つております「ありがたいう」ということと一寸違ふようであります。しかしありがたいうこととは恩を感じての情でありますから、結局同じことであります。がしかし、遇いがたしという言葉はあります。ありがたしという言葉もあるかもしれませんが、一つも見つかりません。「勿体なや」もありません。しかし、もつたいないとか、ありがたいう言葉は日本の言葉として非常に大事な言葉でありまして、これも『広辞苑』という辞書を出されておる新村出さん、あの方はまじめな方でありまして、私も一度はお会いしていろいろとお話を聞

き、もつと何度でもお会いしておればよかったと思う方であります。その方が「勿体ない」という言葉は、どういふところからきておるのであるのか、どうしてああいう字を使うのであるかということについて研究されたものを見たことがあるのであります。それをもう一度見ようと思うけれども、どこにあるかそれも忘れてしまったのですが、ともかく『広辞苑』というものが残っておりますからして、これでいくらかわかるであろうかと、「ありがたい」「勿体ない」もう一つあります。「かたじけない」これらの三つの言葉は、同じように使っています。「勿体ない」というのは少し違うようです。辞書を出しているところどう違ふかということを見ますけれども、先生も特別の研究のときには、何か苦勞していらっしやるようですけれども、辞書なんか書いてあるのは、大抵同じことで区別はつきません。この方が生きていらっしやればおつきあいをして、こんなことを話題にすればよかったと思うのですが、何か残念な気持ちがあるのであります。

「かたじけない」という言葉は『歎異抄』の中にあります。

「五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と、そこに「かたじけなさ」があります。

「いままた案ずるに、善導の、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみつねに流転して、出離の縁あることなき身としれという金言に、すこしもたがはせおはしませず。さればかたじけなくも、わが御身にひきかけて」

ともう一つ「かたじけなく」があります。「ありがたい」という言葉も、「勿体ない」という言葉もありませんが、「かたじけない」という言葉がある。その「かたじけない」という言葉は、ありがたいさも勿体なさも含んでいるけれども、「かたじけない」という言葉のほうが「勿体ない」に近い。こういたしますと「ありがたい」ということと、

「勿体ない」という言葉の感じというものを、「かたじけない」という言葉をたよりとして戴いてみる方法はないでしょうか。曾我先生のお話がそんなことであつたか、ないか知らないけれども、あまりにそのときの話が忘れられないので、何とかその点を私なりに手探りでもしてみたいと思つております。

六

それから一つ気がつきましたことは、源信僧都の

煩惱にまなこさへられて 撰取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて つねにわが身をてらすなり

という言葉です。二階の控室に先生は『正信偈』の言葉を墨黒々と書いてあります。

極重悪人唯称仏 我亦在彼撰取中

煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

と、二枚折に書いてあります。『往生要集』では「極重悪人無他方便」という言葉と、「我亦在彼撰取中」という言葉は、別なところに出ておりますけれども、親鸞聖人ではそれを一つにして、「極重悪人唯称仏 我亦在彼撰取中」と「煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」といわれている。ここに「我」という言葉が二つある。一番初めには我亦在彼撰取中と、大悲の光明の中に撰め取つて捨てないというその撰取の光の中に私もおるのであります。そこに我亦在彼の我があります。一番後えきて「煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」と、もう一つ我が出てきます。

あの二つの私の言葉使い、初めのほうの我は私でもあり、みな助かる道の中へ、私も仲間にしていただいたというのですから、ありがたいということでないでしょうか。先ほどの話でも大抵御了解になつたでありましょうが、自分だけ助かつて他は助からんというような法では、何か自分が特権でも持つておるようなことで、実を言うとあまりあ

りがたいことでないのではありません。この法によって親も助かり、子も助かり、亡き子も往生する、敵も味方もない、皆この法一つで救われてゆくべきである。我も亦ということは裏から言えば皆救わるべきである、皆救わるべきであるということが、我亦在彼攝取中の我であります。これはまことに大事なことでありまして、大体浄土往生が信じられるとか信じられないとかいうことは、あまりに利己的であるからでしょう。自分だけ助かろうと思うから容易に信じられないのです。みんな助かる道である。これより他に助かる道はないのである。仏法を信ずる者も仏法を謗る者も邪見の者も憍慢の者も、いずれも長い目で見れば、みな救われてゆくのである、ということが浄土往生の道であります。先ほど申しました往相・還相ということでも、筋道から言えば信ずる者は往生し、信じない者は往生しないのであります。それはそうでありませうけれども、しかしもう一つ碎いた気持ちから言ううと今信じなくてもいつかは信ずる。「一切衆生悉有仏性」ということが『涅槃経』に説かれております。一切衆生悉有仏性ということはどうして言えるであろうか。われわれの目から見ると、あんな男には仏性などない、ああいふふうに世の中を乱し、世間を騒がすような者には仏の心はないと言わなければならん、一切衆生悉有仏性ということがどうして言えるであろうか、ということが『涅槃経』の問題であります。その『涅槃経』の問題を『教行信証』『真仏土巻』に引用されまして、長い目で見よ、長い目で見るということが先ず一つの答えであります。長い目で見よ、あいつは困った人間だと言うておる方が、却って先になってこちらのほうを導いてくれることになるかもわからない。後の世かけて眺めてみると、あんなやつがと思うておる人間が翻然として改めて、仏法を信ずるようになってならんとも限らない。長い目をもって見なければならん。この世だけの目でない、後の世かけて末の末まで長い目で見ると、先ほど申しましたように後の者が先やら先の者が後やら、信じた者が後やら謗する者が先やら、そういう答えになると思います。長い長い目で見るということが第一であります。

それから第二の答えは、仏の心において一切衆生悉有仏性、どんな人間でも仏の心があるということは、仏の心に

おいてである。阿弥陀仏の心において仏性のないものはない。あんな者に仏性があるものか、あんな者に仏心があるものか、ということは人間が言うことであって、大悲の仏心においては仏性のない者はない。皆仏心があるのになぜあんなことをするのだろうかというのが「悲」ということである。そんなことはない筈だ、仏心がない人間はないはずだ、というのが如来大悲のお心というものである、これが第二の答えである。

第三は、聞けばわかるのだ、この目で見ようとするとするからあいつは悪党だ、あいつは善人だ、善だの悪だの言おうとするけれども、これが仏法というものである、これが仏心であると聞かしていただければ、お前だって救われるじゃないか、お前だって救われるのにどうしておれが救われれないということが言えるか、とにかく大きな仏のお心というものを聞かしていただくのである、こういうふうに答えてあります。

そういうようなことで、それでなければ往相も還相もない、自利と利他だけではないのです。自分が助かりその次に人を助けていこう、いわゆる聖道自力の教えていいのでありますけれども、如来大悲の本願を信じて、浄土へ参らしていただくということはみんな往くのだ、信じておる者だけでない、謗っておる者も皆往くのだ。だから『教行信証』には「敬白一切往生人」と言われる。敬白一切往生人というようなことを読みますと、一切往生人と言ってあるから、往生を願う人間だけに呼びかけられているように思うけれども、それは言葉の感覚、言葉の味です。「敬って一切の往生人に白さく」という言葉を拝読すると、已今当の往生は、昔往生した者も、今往生する者も、また後の世に往生する者も皆一切の往生人、またそれでなければ条件付の往生、こういう人間だけ往生でき、こういう人間は往生できないのだ、ということであるならば、それは本当の宗教、本当の道というものでないのでしょうか。極りなき道は一人残らず救われる。だから二種深信を見ましても、法の深信のときには、

「二つには決定して、深く彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受したまふ……」

機の深信には「自身は」と言うてあります。機の深信については「われらは罪悪生死の凡夫」そんなことは言っ

い。機の深信のときには誘いが無い。機の深信というのは、大体何にも話をしないのがほんとうでないかと思えます。何か高いところにおいて、人間はこういうのですというようなことは、これはちょっと説教しにくいものなんでしょう。私はどちらかというと機の深信の話をするのは嫌です。機の深信は話をするのでなくて、機の深信が話す。ということは法の深心だけしか聞かえないのだけれども、曾我先生のお話など聞いてもそうではないでしょうか。自身は信ずと言われたことがあります。そうすると機の深信というものはよほど深かったことに違いありません。けれど機の深信というものは、そういうものだとすることはお説きにならずに、機の深信を語るのではなくて、機の深信が語る。何があんなに話さしておるか、仏法の尊さをどうして話すことができるかというところ、誰が話すのでもない、機の深信が話しておるのである。話しておるほうが機の深信で、そうして話すほうが法の深信である。こういうことでありましょうね。ですからしてその法の深信というのはいつでも「も」です。私も、みんな助かるところの大行であり大信である。それによって大涅槃をさるところの大なる道において、私も救われるのである。それが我亦在彼撰取中の「我」である。私も撰取不捨の光の中へ入れていただいたのであります。ありがたいことですなあ、というのがそれを、ということになると、先ほども申しました「かたじけなさ」です。このときはみんなもではない。「よくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」と、この私のためにということが大体勿体ない、という言葉の感じではないでしょうか。たとえば私もいまお昼飯をいただきました。一日のうちに夕飯には苦勞して魚など食べさせてくれる。そのとき勿体ないと思います。なぜ私がこういうふうに生きたものを食べて生きなければならぬか。自分はそれだけの資格があるのであるか。ありがたいなあ、きょうも御馳走食べてというより、勿体ないという感じのほうが強いのであります。そのときに私のためになつたときに、大悲無倦常照我、同じ我であるけれども常照我のほうはかたじけない、勿体ない、煩惱障眼雖不見の大きな撰取の光明の中に私も照らされておるのでない、大悲無倦常照我で私を

照らしておつて下さるのであるというところに……ですから一切衆生の救われる道を開かしていただくということが私一人のためであると、こういうふうに感じられるところにありがたさ、勿体なさというものがある。こういうようなことでないであろうか。ありがたさという背景がなければ自分一人、私のためにということとは出てこないに違いない。

七

そのように知られてきますと、三部経のことを思います。『大無量寿経』は一切の往生人、すべての者がみな本願力に乗ずればすべて浄土へ往生するのである。一切の往生人、十方衆生の救われるところの道をお説き下されたのであります。だからしてその十方衆生の救われる弥陀の本願において私も救われてゆくのである、ということでありましょう。もし十方衆生のうちに一人でも救われない者があるとすれば、ほんとうにありがたいと言えないのでありましょうね。いまごろそういうことを言う人はないかもしれませんが、若い頃、「それでは猫も杓子も聞こえるのですか。」とよく聞いた人がある。「そうですね。」と返事します。猫でも杓子でもお念仏すれば助かるのですか、そうですね。へーッあんだどうです、猫も杓子も助かる、あんだ助かると思えますか。猫のような根性もおおし杓子のような根性もおおる、猫も杓子も助からんというところもちょっと危くなる。あんな人はだめだということは、こっちの助かることを危くすることであります。

昨今は何か物騒になりました、私ら明治時代に生れた人間の知らんことでもあります。けれどもこの間あるところで先生そんなことまで言うていいのか、と言われて私考え直しておるのですけれども、私は明治時代に生れた者です、どうしても保守的な考えをしがちです。社会党のことはよく知らないけれども、あの人たちでももし念仏を申しとくれたらどうなるだろう。念仏申す社会党、念仏申す共産党というのができてきたら私はどうしましょう。私はそれはだめだとは言えないね。そういう社会党ができ、そういう共産党ができればよくなるに違いありません。念仏申

しておるんだからね。そんなこと言えますか、というて若い人に念を押されると、ちょっと控えなければならぬけれども、しかし私は何かそんなような気がするのであります。やっぱり世界はこうならなければならぬ、人類はこうならなければ幸せにならないと言っておるのだから、言うことだけはもつとどけれども、何といつても念仏しない、本願を信じないのだから話はずかしくない。本願を信じたら話合いができると思うのであります。そもそも話無用というようなことを言うのが本願を信じない証拠なのであります。本願を信ずればみなどうなるうとも、ほんとうに根本的な意味において同じ腹ですから話せばわかる、というものが出てくる。だから聖徳太子で申しますれば、「篤く三宝を敬え」、篤く三宝を敬えばともにこれ凡夫であるということになって、御意見ごもつともと、そこはあなたの言う通りごもつともだと、こうしまししょうというものが出てくる。だからみんな念仏申すようになれば、世界平和になると私は思うております。だからそういう点へ行きますと、もうでぎるだけ広く考えてもいいのでないでしょうか。念仏申せば社会党も共産党もみんな浄土へ往くのだ、娑婆におるときには喧嘩したものだけれどもというふうなものがある。でもそんなことを言うておつても、なかなか何もかもみんな念仏申す、というようなことはできないのであります。でもそんなことを言うておつても、なかなか何もかもみんな念仏申す、というようなことはできないのでないでしょうか。それはそうかもしれない。先ほどから申します長い目で見るということであります。

昔、代り念仏というものがあつた。仏様へ出て代りに南無阿弥陀仏を称える。それは子供や孫は一向南無阿弥陀仏の南も知らない。それらがあつた。死んだらどうなるのですか。代りにやるんだなあとという。親が子の代り孫の代りに念仏をする。異安心だとかいわれたそうです。私はないがたいことだと思つた。代りというのは代表、邪見の人を代表して私が念仏する。私の根性の中に邪見もあるのだから、邪見の者が念仏称えないならば、私が私の邪見の根性を代表して念仏申します。そうすればいいのではありませんか。背く人の姿を見ても後ろへ廻つて後ろ姿を拝まう。腹を立てておる人はその姿を見て拝んでいこう。そうして私の根性は根性はと、こうしていけばみんな代表的な

念仏である。長い目で見ればみんな往生する。そうしなければ私は助からない。あなたは助かりますけれども、あなたのお子さんは助かりませんよと言われても、よろしくございます。あの息子は助からんでも私は助かります、そういきますか。そういく人もあるかもしれないがね、しかしそうはいかないところにそこに人間のかかわりあいというものがあるのであります。少し考える人なら待って下さい、私の助かるのはもっと延ばしてもよろしいから、というのがほんとうでないでしょうか。そうすればみんな助かる道、それが如来の本願である。それが浄土往生の道である。その中へ私も入るのですか、ありがとうございます、ということが我亦在彼摂取中の我であります。

ところがそういうふうは一切衆生一人残らず助けるという本願を建立されたのも、「よくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり」、私一人がそれでなければ助からんのである、こうなったとき、大悲無倦常照我の我は私である。今度は他の誰でもでない私一人、私一人のための本願であったと、これは利己主義でも何でもありません。一切衆生の救われる道に誰が行くか、私一人である。「ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と。『大無量寿経』はみんな助かる道を教えられる。『観経』はそのみんな助かる教えは汝一人のためであることを教える。『観経』では韋提希夫人一人のためである、ということではないでしょうか。だから韋提希夫人の喜びというのは、この法によっていま背いておるわが子阿闍世も助かる、亡くなられた王様も助かる、みんな助かる。

弥陀釈迦方便して 阿難目連富楼那韋提

達多闍王頻婆娑羅 耆婆月光行雨等

と、みんな助かる中にそこに韋提も救われてゆく。けれどもなぜみんな助からなければならぬかという、みんな助かるについては私一人のためである。なるほど達多闍王頻婆娑羅が助からなければ私も助からぬ。私が助からなければ阿闍世も助からぬ。そうすればみんな助かる道がここにあるのだと説いて下された『大無量寿経』の思召をいた

だいてみれば『観経』が出てきて、ひとえに韋提希一人のためなりけり、ということでしょう。だから蓮如上人は「かたじけなくも」という言葉を使っておられます。

「むかし釈尊、靈鷲山にましまして、一乘法華の妙典をとかれしとき、提婆阿闍世の逆害ををこし、釈迦、韋提をして、安養をねがはしめたまひしによりて、かたじけなくも、靈山法華の会座を没して、王宮に降臨して、韋提夫人のために、浄土の教をひろめましまししによりて、弥陀の本願、このときにあたりてさかんなり。」

ここに「かたじけなくも」という言葉があります。大体お釈迦様ともあるえらい方が、しかも『法華経』を説いていながら韋提希夫人が悩んでおるということで出てこられるというようなことは、かたじけなき過ぎる、勿体ないことでないであろうか、というわが身一人のありがたさというものを勿体なさと感じて下されたのが、韋提希夫人であると、こう言っているでしょう。

こういたしますと、曾我先生の話聞いて、その詳しい内容は忘れてしまいましたけれども、私もせめて一時間ぐらいいはこの心持ちを話したいと思えますができません。もしもありません。

教えはどこまでも十方衆生一人残らず救うというのが弥陀の本願である。「唯除五逆誹謗正法」とありますけれども、宗祖聖人では、「唯除とは、ただのぞくという語なり、五逆の罪人をきらひ謗法の重きとがを知らせむとなり。

この二つの罪の重きことを示して、十方一切の衆生みなもれず往生すべしと知らせむとなり」、あの言葉でも親鸞聖人はだいぶん消化しきれなかったのでしょうね。唯除五逆誹謗正法、なぜそんなことをおっしゃる。至心信樂して我が国に生れんと欲え、とある、その本願に随わないような者は五逆罪を犯し佛法を謗るにきまつておる、言わんでもよいことをおっしゃるような気がする。言わんでもよいことが本願にあるはずはない。そうすると、除くという敵しい言葉こそ感動して忘れられない。それが難信であります。真宗の教えは信じられない、難信の法であると言っております。難信ということは信心を獲た人の心持ちであると、どこかで曾我先生が言うておられます。信心獲た人の感動

が信じ難いということである。

一体信じ難いということはどういうことなのであろうか。信じ難いという言葉で現わすよりほかに道がない信心というものがあるような気がする。家における息子を親たちは心配するけれども、勘当した息子のことを親たちは忘れないうのだが、どうであらうか。もし勘当された息子にその気持ちかわかればそうかもしれない。そうかもしれない、ということとは感激でしょうか、信じ難いという言葉でなければ現わすことができないものが、それが本願の信心である。その難信の法を説いて一切衆生皆救われるのであると、『大無量寿経』は皆當往生、皆得往生ですべての者が往生することができると説かれた。この道開けてこの道を聞かれたのでありましょう。ありがたいことであると思っておいになったのでありましょう。けれども、さてわが身のことになると、またいろんな問題が出てきたところで、かたじけなくも『法華経』というような重大なことを捨てて、韋提希夫人ただ一人のために下されたのである、ということを書いてみると、「韋提と等しく三忍を獲る」と『正信偈』にお喜びになっております、その祖師聖人の気持も、「よくよく案ずれば親鸞一人がためなりけり」、小慈小悲もなき身にて有情利益も考えてみた、いろいろなことを考えてみた、よくよく考えてみると結局は親鸞一人のためである。一切衆生を救おうという本願も私人のためであったと、こう「おほせさふらひし」、そこに「かたじけなさ」というものがあるのである。

これでありがたいというも、かたじけないというも、勿体ないというも結局同じことであって、あなたたちに使いわけしなさいと決して言わない。使いわけしなさいとは言わないけれども、その言葉をいただいで、曾我先生の昔のことを思い出し、そういうふうな話をしていたことがある、ということをもって、追憶のお話といたしたいと思っております。

（本稿は、昭和四十六年十月二十一日、富山市の月愛苑にて講義されたものの筆録である。先生と関係の方々の御好意で集録することができました。文責編集部）